

第 3 回かわにし市民会議 議事メモ

班	3 班「住宅都市としての魅力向上」
コーディネーター	山根 晃
ナビゲーター	佐木 学
説明担当者（自治体）	総務部 曾野副部長
日時	2019 年 7 月 27 日（土） 13 時 00 分から 16 時 00 分
場所	川西市役所 4 階 庁議室
その他	参加者数 16 名

趣旨・概要

- ①地域で取り組む防災活動について
- ②川西市の地勢から、予想される災害と発生時の避難行動等について説明

総括

コーディネーター総括

今回は防災の観点から、ナビゲーターと市の説明をもとに話し合った。次回はコミュニティの分野のナビゲーターに来ていただく予定なので、今日出た自治会の話も含めて議論を深めていきたい。

協議の流れ

1 第 2 回市民会議の振り返り

第 2 回市民会議の改善提案シートを用いて前回の振り返りを行うとともに、今回は防災面を大きなテーマとしていることから、その分野に特化したナビゲーターと担当部署から説明をしてもらい、住宅都市としての魅力向上について考えていく。

2 三原市小坂町防災会の概要と活動について

（ナビゲーター 小坂町 防災会会長 佐木 学氏より説明）

- ・三原市では、自助・共助・公助に加え「近助」を取り入れた防災活動を行っている。
「近助」…普段から近所同士で助け合う関係づくりや仕組み
- ・自然災害は地形で決まるが、地域の防災力は地域のコミュニティ力で決まる。
- ・小坂町の行事は運動会も小学校と地域とで一緒に行う。行事は町内会や自治会単独ではなく、すべて一緒の団体で行う。
- ・三原市小坂町防災会は、どちらかが不在の時でも対応できるように、会長（町内会長）と会長代行（自治会長）が同権限を有している。災害時だけではなく行方不明者の捜索や不審者情報に関する情報など、町内の安心・安全に関わる案件に対応できるよう規約に定めている。
- ・脱走犯が空き家に潜伏していた時も、防災会が一週間以上朝夕小学校に送り迎えを行っ
参）：市民参加者、コ）：コーディネーター、ナ）：ナビゲーター、市）：説明担当者

(様式①)

た。犯人は空き家については所有者の了解がないと、警察が捜査できないと知っており、隣町の空き家の2階に潜伏した。空き家は犯罪の隠れ蓑になる。

- ・災害の備えについては、逃げるが勝ち、逃げたら飯とこれだけを徹底している。
- ・11月3日（文化の日）を「小坂町防災の日」と定めて毎年訓練を実施している。平成30年度で13回目になり、例年300名程度が参加している。
- ・避難所を3日間開設したが、高齢者・障がい者・ペット同伴の方の対応が課題と感じた。福祉避難所との連携をどうしていくか進めている。
- ・避難すべきタイミングの見極め方は、行政が呼び掛けても個人が判断するのは難しい。小坂町ではこれを「避難スイッチ」と呼び、どのようにすれば住民が適切なタイミングでスイッチを押せる＝動けるのか、検討会議を重ねている。
- ・「普段できないことは非常時にもできない」

①自主防災、防災体制

コ) 市内で防災活動が積極的に行われている地域はどこか。

市) 清和台地区やニュータウンが多い。

現在、清和台地区で避難所運営マニュアルができており、また地区版防災マップが載った地区防災計画を策定中である。

参) 小坂町は防災訓練を13回継続して行っているのは成功と言えると思う。参加しないとわざとといったときに動くことができないのはわかっているが、働いているときに勤務先でやっている訓練に行くのが嫌だった。面白くないものに人は参加しない。動機付けで工夫したことは何か。

ナ) 参加者は初回からほぼ300人の横ばいで、参加者数自体はあまり変わっていない。防災会の立ち上げ時に全世代型の防災訓練を行うことができる工夫をした。必ず小学生に参加してもらうようにすることで、保護者や学校の先生にも参加してもらう仕組みづくりをした。また高齢者は炊き出し等の「食事」をすることを目的に訓練に誘っている。毎年地区の役員が変わるが、役員は必ず参加してもらうこととしている。今は2巡目する人も出てくるような時期。ある程度強制的に参加していただいている部分もあるが、そうして訓練が住民に浸透していつている。

参) 三原市では、非常時に避難所（学校）の窓を割って入ってよいという規約があると聞いたが川西にはないのか。

市) 市が防災体制を組んで、まずは公民館、続いて小学校と避難所を拡大していくが、開設前にそのようなことをするのは現在のところ認めていない。ただし、公園などを地域が「一時避難場所」として指定しているので、有事の際は一時避難場所の利用も考えていただければと思う。

ナ) 三原市の場合、市は中学校の避難所開設を市が行い、小学校や自主避難所は、自主防災組織が避難所開設を行う。避難所開設の際に教育委員会に校舎の鍵を開けてもらうが、

参)：市民参加者、コ)：コーディネーター、ナ)：ナビゲーター、市)：説明担当者

(様式①)

その前に非常事態がくれば窓を割って入っていいような取り決めとなっている。

また、三原市では身を守る生活するために開設する避難所と一時的に非難する避難所を区別している。一時的な非難はお寺などに逃げることであり、命を守る行動は自助・近助で十分にやっさいこうとなっている。

参)「避難所の運営は 3 日が限界」という経験談は、物資的な面か、それとも精神的な面か。

ナ) まずハード面として、床が冷たく固いので高齢者を中心に寝るのが厳しくなってくる。被災時は看護師が 5 名ほど名乗り出てくれたので、高齢者の健康管理はできた。ただ、3 日も経つと役員も職場に出たりするので、今のところ運営的な面で 3 日が限界と感じた。

参) まちづくり出前講座の実施回数と参加者数を見ると、参加者の総数が増えているが、H27 年度以降は 1 回あたりの参加人数が減っている。毎回費用が発生しているのであれば、コストパフォーマンスが悪いと言えるのではないかと。思い切って回数を減らしてもいいのでは。

市) 訓練内容が様々で、かつ地域から要望があった場合に開催しているので、なかなか指摘のような改善は難しいと考えている。ただ、訓練参加者の固定化は市も課題としているので、何とか参加者を増やすよう呼びかけは続けていきたい。

②「避難スイッチ」(避難すべきタイミングの見極め方)

参) (一番危険視されている多田小学校地区では、防災訓練等と呼び掛けても参加者がなかなか集まらないという市の説明を受けて) 昔に比べると、雨量も増えてきたし経験則でというわけにもいかない。基本的には皆自分の住んでいる場所は安全と思って過ごしている。ただ、市民も危機感は育ってきていると思うので、そこに働きかけができればいいと思う。

ナ) 避難するタイミングは難しい。被害は水だけではなく、昨年の豪雨では犠牲者の 8 割が土砂災害によるものだった。避難のきっかけは、隣の人の「一緒に行こう」「連れだって」だった事例もあることから、「避難スイッチ」を誰が・いつ入れるかが三原市の課題となっている。

参) マンションに住んでいると隣人も誰か分からない。管理組合はあっても自治会がないところが多いので、一個人で避難するタイミングを考えるのは難しいと感じる。

ナ) 水害においてむしろマンションは避難する必要はなく、逆に他の住民を迎え入れてあげてほしい。ただ断水・停電については考えておく必要がある。貯水タンクの限界日数を把握し、有事の際は互いに節水するなどの取り組みはできるはずだと思う。

3 「災害に備える～自分の命を守るために～」(総務部曾野副部長より説明)

・(風水害) 地形によって被害の大小が分かれてくるが、多田地区・石道付近は冠水や浸水被害が想定される。平成 30 年 7 月豪雨を経て一庫ダムの洪水調整量を大幅に増やしたことで、危険性を一定低減させる効果が期待できる。

参) : 市民参加者、コ) : コーディネーター、ナ) : ナビゲーター、市) : 説明担当者

(様式①)

- ・川西市防災マップを紙面版とWeb版で公表している。猪名川における浸水想定区域が見直されたため現在改訂作業中。令和2年度更新予定。
- ・災害時、「自助」：「共助」：「公助」は一般的に「7」：「2」：「1」と言われている。地域の自主防災活動を促進するため、要望に応じて出前講座を開いている。出前講座については、参加者の高齢化が課題となっている。

①ハザードマップ、かわにし安心ネット（情報メール）、ひょうご防災ネット

コ) ハザードマップを見たことがあるか

参) 見たことある方が多数

参) ハザードマップを見ると、場所によってかなり危険な場所が分かれている。住民自身が自分のエリアの理解ができているか疑問である。ひょうご防災ネットやかわにし安心ネットも、細かな地域は設定できないようなので、GPS と連動して細かく避難の必要性の有無を教えてくれる仕組みがあればいいと思う。情報を細かく伝えていけば、自助の行動にもつながってくると思う。

市) 位置情報から情報を出して行くのは難しい。

参) ハザードマップは学校の授業で見たが、最後は回収されてしまったので、配布でもよかったと思う。また、地域ごとのクローズアップしたマップがあると、よくわかるし、自分が住んでいるところと関連付けて興味を持てるのでいいと思う。

以前ニュースで、住民自身が歩いて書き込むハザードマップ作りがあることを知って、自分自身の地域を見直すきっかけにもなるし良いと感じた。

そこは小さいコミュニティでやっていたので、川西に置き換えるのは難しいとは思いますが…。

参) 猪名川のPTAでは、保護者が歩いて見つけた危険ポイント（人気がない、車から見て死角になっている、等）を書き込む取り組みをやっているのを聞いた。

コ) 小坂町のように年に1度防災訓練などで集まる機会があれば、まち歩きするもよいのでは。普段わかっているつもりのことも、意外とわからなかったことが見えてくるといった地域も聞く。

ナ) 小坂町防災会では去年の地震のブロック塀の倒壊の1週間後には危険個所のチェックを行った。

コ) そういった活動をすることによって、危機感へのアンテナの感度がよくなるのではないかな。自分の住んでいる場所はこういった地形でどういう場所なのかなど。住んでいる場所の地形は動かすことができない。

参) 娘が小学校6年の時に自由課題で防災マップを作ったが、それを通じて防災に対する意識がぐんと上がった。県が出しているハザードマップでは、実際歩いてないので、網羅しきれていない点があると感じる。ただ、普通の人が歩いてても分からないところ

参)：市民参加者、コ)：コーディネーター、ナ)：ナビゲーター、市)：説明担当者

(様式①)

があるので、専門家の視点が必要にはなってくると思う。

②自治会について

参) 三原市は自治会加入率が高いので色々と意欲的に取り組んでいると思う。自分も自治会役員をしているが、若い人が入らない。災害時の見守りもプライベートの問題があり不安がある。

ナ) 都市部ほど加入率が低くなるのはどこも同じ。ただ、災害時、自治会に加入していない人がなくなったり、苦勞しているのをたくさん見てきた。自治会に入っていないなど組織化していない住民の安否確認などが全国で課題になってくると思う。三原市では、自治会の加入にかかわらず75歳以上の人に「敬老会」と称してイベントに招待し、日ごろからコミュニケーションを図っている。

参) 自治会に入っていない人でも災害時の情報は得られるのか。物資等はもらえるのか。

市) 加入の有無に関わらず、市は全ての住民に対して支援を行っている。

参) 自治会をやめる時に、「自治会を抜けると避難物資等がもらえない」と誤った情報を持った人がいた。意外とそういうことも知られていないのでは。

参) 自治会に入っている人も入っていない人も同じとを感じる。

コ) 行政の立場では皆さんに平等に情報を提供しはするが、防災の役割の1割しか占めない「公助」の部分である。自治会や近所の方とのつながりは、「共助」や「近助」につながってくる話になってくるかと思う。

③有効な情報発信の方法について

コ) ダムの放水等の取り組みはどれだけ市民に浸透しているのか。

市) 市民向けの説明会を開催しているが、参加者が少ないのが現状である。災害の規模が大きくなり、昔のように経験値が通用しない時代になってきたので、避難をしていたくことが大事だと考えている。

コ) 情報が事前に伝わっていれば、危険性があるとわかると思うが、ダムがどういう機能をはたしていて、どういった調水機能があるのか、そのものの働きを市民が知らないことで、危機感等も芽生えてこないのではないのか。ダムの知識は広報やHPで周知しているのか

市) 今後とも進めていかせていただきます。

参) 散歩していて、防犯カメラが設置されているのに気付いた。他に設置されている場所について興味を持ったが、調べ方がわからなかった。例えば、電柱に防犯カメラの担当課や連絡先を貼るなどすれば、知りたい情報にすぐ近づくことができる。

市は色々なことを広報やHPで情報発信していると言い、確かにそれらを見ない人があれこれ言うのは悪いとは思いますが、調べるきっかけや方法が多くあるのもいいのではないのか。

参) : 市民参加者、コ) : コーディネーター、ナ) : ナビゲーター、市) : 説明担当者

(様式①)

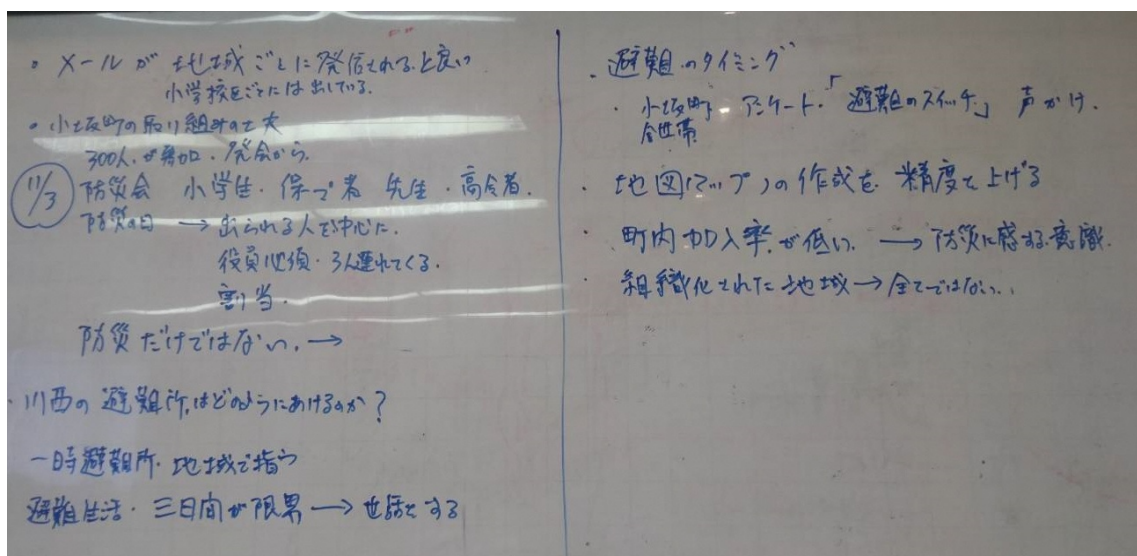
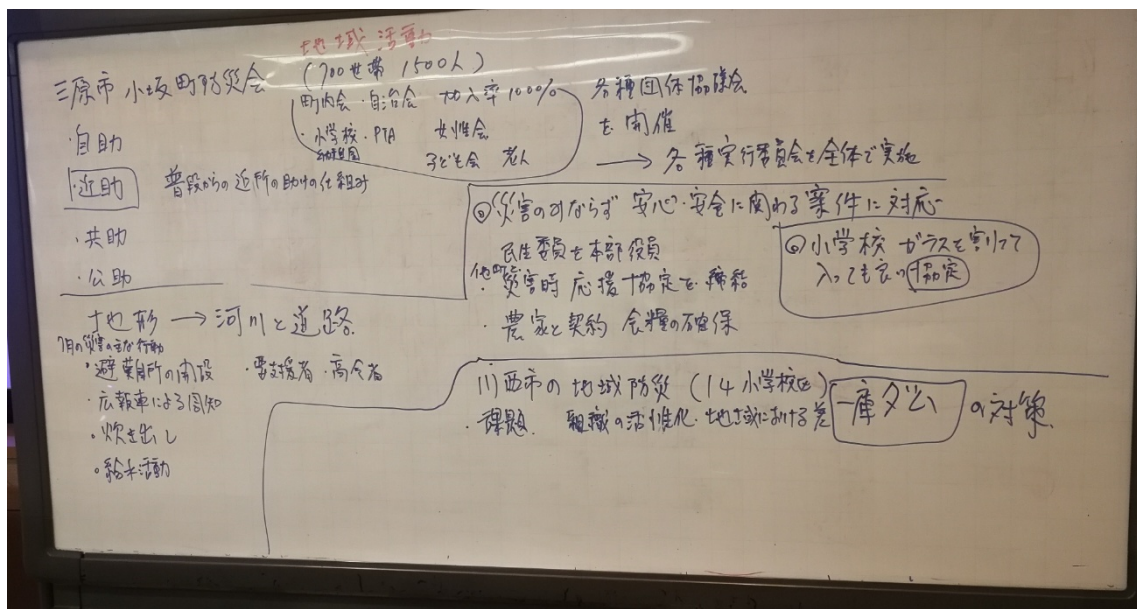
ダム の放流にしても、生活に密着していなければ想像もわからない。川西市独自でユーチューブ等で動画配信する等工夫は色々できるのではないかな。また、キセラで他のイベント等の人が多く集まるところで啓発してはどうか。

市) 意見を受けて市の HP や広報等で周知していきたい。キセラでの防災のイベントも検討はしているが、実現はできていない。できる限りの情報提供をしていきたい。

参) 川の増水などはHPで確認するが、家の裏の水路については溢れそうになってもどこに聞けばいいか、わからず困ってしまった。

参) 情報発信は「興味を持たせる」のが難しいと思う。また、他の人が言われていたように「興味を持った」人を次の段階に進ませるきっかけづくりが大切だと感じた。

ホワイトボードの写真



参) : 市民参加者、コ) : コーディネーター、ナ) : ナビゲーター、市) : 説明担当者